

「青少年教育指導者専門研修」

平成 25 年 1 月 22 日（火）～25 日（金） 3 泊 4 日



I 事業の背景（必要性）

国立青少年教育施設の役割の一つとして、青少年教育指導者を対象とした専門性の高い研修の機会の提供が挙げられる。

国立中央青少年交流の家は、我が国最初の国立青年の家として創設された歴史的な背景や、首都圏からも比較的近く、交通アクセスなどに恵まれていることから、多くの若者や青少年指導者の研修などに利用されてきた。また、富士山の麓にあるというフィールドや多様な研修が行える施設設備なども有している。

こうしたことを踏まえ、本所では、教育企画事業の柱に専門性を高める実践的な「指導者研修」を重点に掲げて取り組んでいる。

特に本年度は、今日の青少年教育が抱える現代的な課題を取り上げるとともに、最前線で活躍する指導者にとって役立つ実践的なものを心がけ、青少年教育活動に携わる指導者などの資質の向上が、より図られるような研修を目指した。

II 事業の概要

1. 趣 旨

青少年教育施設や教育行政、地域等において、青少年の健全育成に携わる指導者に求められる、専門的な知識・技能を習得し、指導者としての資質・能力の向上を図る。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

青少年の健全育成に携わる者 30 名

（青少年教育施設・教育委員会・教育研修所・NPO 法人団体・民間自然学校・自立支援機関等・青少年厚生施設等で勤務及び活動する者）

(2) 参加状況

<内訳>

	男性	女性	合計
青少年教育施設	22	3	25
その他	3	1	4
合 計	25	4	29

<参加地域>

	男性	女性	合計
東北・関東	12	3	15
中部・近畿	12	0	12
中国・四国	0	1	1
九州・沖縄	1	0	1

(3) 広報の方法

- ① 募集チラシを作成（交流の家作成）
- ② 全国青少年教育施設への配布
- ③ 全国都道府県青少年教育担当部局への配布

- ④ 全国政令指定都市青少年教育担当課への配布
- ⑤ 神奈川県・山梨・静岡県の近隣市町村青少年教育担当課への配布
- ⑥ 青少年教育に関係するNPO団体等に配布
- ⑦ 新聞社へ広報文の掲載を依頼
- ⑧ 自然体験活動推進協議会のメールマガジンへの掲載依頼

3. 日程

	13:20	13:30	15:00	15:15	16:45	18:30	20:30	
22日 (火)		開講式	講義(1) 「青少年教育の ^{いま} 現在」		実習(2) 「学びの場づくり」		情報交換会 (夕食含)	
23日 (水)	9:00	講義・実習(3)「グループワークの理論と実践 ー対話促進の技法を中心としてー」				17:00	18:30	19:30
						ミニ講話(4) 『伝える』を磨く! 話し上手のポイント		
24日 (木)	9:00	事例研究・演習(5)「ケーススタディで高める企画力・運営力」 事例1 県内全小学校が実施している自然学校推進事業の取組み～兵庫県の事例～ 事例2 全国各地に広がるネットワークづくり ～森のようちえんに着目して～				16:30	20:00	
						「まとめ」 ー企画力・運営力 の要点ー ※途中, 夕食		
25日 (金)	10:00	11:30	12:20	(解散)				
	講義(6) 「森は海の恋人 人の心に木を植える」		閉講式					

4. 内容 (活動の様子)

(1) 「青少年教育の^{いま}現在」 (講義)

講師：国立中央青少年交流の家所長 服部英二



- ① 青少年教育施設には、予め設定しておく意図的なプログラムによって成るフォーマルな教育の側面と集団宿泊生活によって得られるインフォーマルな教育の側面があり、両者を活かすことが大切である。
- ② 青少年教育施設職員に求められる「あいうえお」
 - ・ 「あ」 明るく健康でタフなこと 「ネアカ伸び伸びへこたれず」
 - ・ 「い」 意欲的で若々しくチャレンジ精神が旺盛なこと
 - ・ 「う」 動き軽やかで、フットワークがいいこと
 - ・ 「え」 笑顔とエンジョイ。好感が持たれ親しまれる雰囲気、子どもが好きで仕事を楽しめること
 - ・ 「お」 思いやりあふれ臨機応変な対応ができること、教えることと育むことの意義を理解していること

(2) 「学びの場づくり」(実習)

講師：国立中央青少年交流の家 職員

- ① 研修をはじめるとあって、お互いのことを知ることをねらったアクティビティを行い、参加者の緊張を和らげ、能動的な参加を促した。
- ② 参加者の研修に対する期待を共有し、ともに学ぶ仲間意識の醸成を試みた。

(3) 「グループワークの理論と実践—対話促進の技法を中心として—」(講義・実習)

講師：宇都宮大学生涯学習教育研究センター准教授 佐々木 英和氏

- ① 第1部ではグループワークを行う上で、重要なコミュニケーションについて「<一対一>対面実習」を通して理解を深めた。「伝える」と「伝わる」ことの差異が紹介され、他者を「受け入れること」の難しさの自覚が必要であること、「話し合い」は同時に「聞きあい」として成立しなければ、必然的にディスコミュニケーションが起きてしまうことが、実習を通して説明された。



- ② 第2部は、「対話的雰囲気を活用したグループ学習の手法」を用いて、受講者たちが事業の企画立案を行うグループワークを行った。学習者がグループ活動に主体的に参加することを助ける「対話的雰囲気(学習者同士がお互い自然と尊重し合うような雰囲気)」をいかに醸成するかがポイントであることを理解した。

(4) 「『伝える』を磨く！話し上手のポイント」(講話)

講師：有限会社エムアール代表取締役 関谷 葉子氏

- ① 伝えることが目的であり、話すことは手段である。人と“話す”という行為は、相手の反応を感じる「エネルギーのキャッチボール」である。
- ② 上手に話すための心構え
 - ・自分を信頼し、不安をなくす
 - ・聞き手をリサーチして見たい目を作る(視覚へアプローチ)
 - ・頭で考えようとするのではなく、ハートを開いて自分を信頼する

(5) 「ケーススタディで高める企画力・運営力」(事例研究・演習)

ミーティングファシリテーター：公益財団法人キープ協会環境教育事業部部長 増田 直広氏

事例1 「県内全公立小学校が実施している自然学校推進事業の取組み」

発表者：兵庫県教育委員会事務局 義務教育課 指導主事 大西 秀樹氏

事例2 「全国各地に広がるネットワークづくり～森のようちえんに着目して～」

発表者：NPO法人国際自然大学校校長 藁谷 久雄氏

<事例1の概要>

- ① 兵庫県の「自然学校推進事業」は、「生きる力」を育成することを目的に昭和63年より開始されている。
- ② はじめは113校の小学校の実施からスタートが平成3年以降は全校実施になり、総参加者数は平成24年度末時点で129万人に上る。
- ③ 現在は、公立小学校5年生の児童を対象に4泊5日



以上で県内の施設を利用して実施している。

- ④ 20年目の節目になる平成20年には、学識経験者、学校関係者、行政関係者、保護者から構成される自然学校評価検証委員会を立ち上げ、評価検証報告書「生きる力を育む自然学校」を発行し、これまでの効果を検証するとともに、更なる充実を図る方策が示されている。
- ⑤ 平成21年には、上記委員会の提言と新学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえながら「自然学校実践事例集」が作成された。そこでは各学校が、自然学校を充実させるための「事前・事後体験活動」を組み込むことができるように、具体的な実践事例が掲載されている。
- ⑥ 実施に係る経費は、講師謝金、指導補助員や救急員に要する謝金、活動運営経費、バス借上交通費等で兵庫県教育委員会より定額交付される。
- ⑦ 指導には、教員の外に学生や地域の指導者を指導補助員として動員している。また、教員が引率指導業務に従事する期間を原則2泊3日までとするなど、学校側の負担にも配慮している。

<事例2の概要>

- ① 「森のようちえん」は自然体験活動を基軸にした子育て・保育、幼少期教育の総称である。
- ② 北欧諸国で発祥したとされる森の幼稚園、野外保育であり、日本では、統一された細かな規定があるわけではなく、様々なスタイルの活動が行われている。また、活動場所は森だけではなく、海や川や野山、里山、畑、都市公園など、広義にとらえた自然体験のフィールドを指す。
- ③ 「ようちえん」は幼稚園だけではなく、保育園、託児所、学童保育、自主保育、自然学校、育児サークル、子育てサロン・ひろば等が含まれ、そこに通う0歳から概ね7歳ぐらいまでの乳児・幼少期の子どもたちを対象とした自然体験活動を指す。
- ④ 活動に関わる人たちは、幼稚園教諭、保育士、自主保育指導者、学童保育指導者、自然体験指導者、野外活動指導者、自然の中での幼児教育や保育を望む親などである。
- ⑤ 2005年に第1回「森のようちえん全国交流フォーラム」がくりこま高原で開催されて以来、毎年開催され、多くの人々が集まり盛会となっている。



(6) 「森は海の恋人 人の心に木を植える」(講義)

講師：NPO法人森は海の恋人理事長 畠山 重篤氏

- ① 子どもたちに自然環境のことを伝えるときに、理学的なことばかりでなく、文学的視点や詩心を持って接して欲しい。
- ② 子どもたちは体験を通して感じ、学んでいるときは、大人は多くを語らなくても理解していることが多い。



5. 評価

(1) 評価の方法(アンケート調査野実施)

講義の内容及び運営面について、満足度に関する4段階のアンケートを実施した。

(2) 結果

- ・参加者 29 名のうち、27 名から事業全体に「満足した」との回答を得た。
- ・各講座の満足度はほとんどの講座で 90%を超える回答を得た。

内 容	満足度
事業全体（運営面含）	93 %
講義① 「青少年教育の現在」	96 %
実習② 「学びの場づくり」	92 %
講義・実習③ 「グループワークの理論と実践」	100 %
ミニ講話④ 『伝える』を磨く！話し上手のポイント」	96 %
事例研究・演習⑤ 「ケーススタディで学ぶ企画力・運営力」	92 %
講義⑥ 「森は海の恋人 人の心に木を植える」	88 %

(3) 自由記述による感想

- ① 青少年教育の必要性を改めて理解するとともに、「家」の歴史からも先人たちの願いが知ることができ、意識が高まった。
- ② 現在、企画づくりに携わっているので、そのために必要な知識やヒントが得られたと感じた。
- ③ 事例発表の聞き方や企画のブラッシュアップの仕方等、基本的なことが学べてよかった。
- ④ 青少年教育に携わるためには一点をだけを見るのではなく、広い視野で物事を考える必要性を学ぶことができた。
- ⑤ 内容が充実していたので、国立施設の持ち回りで毎年開催して欲しい。また、色々な施設を見学できるという観点からも有意義であると感じた。等

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- ① 事業を実施するにあたり、昨年度行った青少年教育施設職員を対象に研修内容に関するニーズアンケート調査の結果や昨年度の同事業のアンケートを参考にして、内容を設定した。
- ② 知識として理解したことを実践できることが重要であると考え、講義と実習を組み合わせるとともに、研修の時間を十分に確保した。
- ③ 「企画力」「運営力」を高めるための研修の手法として、「事例研究（ケーススタディ）」を用いて、成功事例の協議を通じて、その成功要因を追究することにより企画・運営のノウハウを習得することとした。
- ④ 「企画力」については、企画と運営を一体的なものとして捉え、事業プログラムだけの企画だけではなく、企画から運営までの全プロセスを企画することを想定した。
- ⑤ 青少年の指導方法として、精神的な内面を育てる手法としてのグループワークに焦点化し、理論的な背景を理解した上で、今後の活動で実践できる力を身につける内容とした。
- ⑥ 指導者として長く経験を積んだ者にとって、自身の中にできている「青少年教育の枠

組み」について再考する機会とした。

2. 運営のポイント

- ① 参加者が主体的に研修に参加できるように事前アンケートを行ない、講義に期待することや自身が課題としていることを確認した。そして、集約したものを参加者に配付し問題意識の共有を図った。
- ② 講師に参加者のアンケート結果を事前に伝え、講義の中に参加者が求めていることを取り入れていただくことにした。
- ③ 事例発表の資料は、事前に参加者に郵送し、予め質問等を考えておくことができるように配慮した。
- ④ 最終日に、ワークシートを用いて4日間の研修のまとめを行い、受講者が個人でふりかえる時間を確保した。また、ワークシートは受講者の理解を得たうえでコピーをいただき、今後の企画運営の参考資料とした。

3. 成果

- ① 青少年教育に携わる者として、技術面のスキルアップだけではなく、様々な専門的分野の理論をあらためて学び理解することで、今後青少年を指導するリーダーとして、また青少年活動の実践や業務に活かすことができる指導者としての資質・能力の向上につながる研修となった。
- ② 長く経験を積んだ指導者にとっても、初めて体験する研修方法や新たな切り口からの講義によって、自身の中に出来上がっていた「枠組み」を再考する機会となった。
- ③ 全国各地、16都道府県から参加者が集まることができたため、それぞれの施設・各地域における取り組みを紹介し、意見交換し合い、参考になる点や改善できる点等を互いに確認することができ、プログラムの内容以外の部分でも充実した研修となった。

4. 今後の課題

- ① 主催者が各講座のねらいや関連性を解説し講座と講座を橋渡しする等のナビゲート技術を向上させることが必要である。
- ② アンケート結果では、概ね満足度が高かったが記述欄を分析すると、評価が大きく二分しているところも見受けられた。これらは今回の受講者の指導歴や経験にバラつきがあったことも一因として考えられるので、募集対象の絞込みも検討する必要がある。
- ③ 事例研究は、参考となる事例を題材とすることが必須であることから、情報のアンテナを高く・広くはり、キャッチすることが必要である。また、依頼する講師を探すうえでも同様のことが言える。

担当：望月奏 望月省吾 柴田勝好